8:15　5月18日(火)　55%
スクラップ帳　テキスト表示

私財なげうち苦学生を支援

豊田父子の「晩登塾」を刊行

旧国道9号沿い北栄町役場敷地(旧由良育英高校地)に、「豊田父子頌徳碑」がある。その碑文には「…饗を隆ならしめたるのみにあらず更に巨費を拠出して東京都に晩登塾を設置し、向学の青年を寄寓せしめ…衆議院議長　清瀬一郎」とある。

「山陰の地が文明開化に後れを取ったのは、『人』がいなかったからである」と私立中学校の設立を発起、東奔西走。〝教育狂人〟とまで揶揄され、あきれもされた太蔵先生。

その苦闘の歩みは、作家松本薫氏の小説『ばんとう』(※晩登＝太蔵先生の号)でリアルによみがえっている。だが、家貧しく上級学校への進学が困難な青年のために、勤め先を世話し自宅で生活の面倒を見た「晩登塾」のことは、ほとんど知られていない。

晩登塾正面(東京・練馬区江古田)

「塾」は大正6年、東京原宿の自宅を開放して始まった。その一端は「登美子夫人(※收先生夫人)は、我々の食事から病気の心配まで、さらに精神的な相談等々その心労は並大抵のものでなかった」(昭和12年卒上村佐)という手記で知ることができる。それも、20年3月の「東京大空襲」で焼失。だが、27年練馬区で再開された。そして清瀬へ移り、昭和60年、68年に及ぶ歴史の幕を閉じた。お世話になった者は130名にも及ぶ。

「郡に聞こえた名家でありながら、(中略)先生の家の畳の耳はほつれ…」(『鳥取県百傑伝　豊田太蔵』山部憲太郎)という記述があるが、それは平成10年夏、豊田家を訪れた時の記憶と重なる。大きな母屋だったが隙間だらけ。クーラーがほとんど効いていない。登美子夫人が「じいさんたちは、自分の家のことは後回しにする人たちで、育英でがいに苦労されたですけぇ」。その一言の重さ…。

「私」を捨て、「世を変えるのは人」と、生涯をかけられた歩み。私たち塾生4名あいつぐい、さきやかな冊子をまとめた。教育に私財の全てをなげうたれた父子の思いの一端を知ってもらいたくて。

(戸田通昭・「晩登塾」の歩みとその記憶～もうひとつの「ばんとう」編集代表者)

(C) The Shin Nihonkai Shimbun Co., Ltd.